

## 【論 文】

## 脱領土化と実存的不安

稲 田 晴 年

## 1. ドゥルーズの世界

動物、植物、鉱物を含めた全存在は、世界に充満する微粒子のごときもので作られている。それらの微粒子は均一の密度で空間に分布しているわけではなく、局所的に凝集してゆるやかなまとまりを形づくり、あちらこちらにおぼろげな姿を漂わせている。その個々の姿を特異性と呼ぶことにしよう。これらの粒子群は、個体の萌芽であるそうした特異性を備えてはいるものの、いまだ潜在態にとどまり、現実の存在とはなりえていない。だがその粒子群もやがては明確な輪郭を獲得し、現実の世界に個体として出現することになる。いやむしろ、潜在態においては不確定性を保っていた粒子群が、現実の世界に生み出される瞬間に個体という枠のなかに押し込まれるのだ。こうしてあなたが生まれ、わたしが生まれ、犬や猫が生まれ、木々が出現し、島や海ができたのだ。とはいえ、個体の殻に閉じこめられた人間は、ときおりかつてのゆるやかな粒子の集合体に戻り、やはり粒子群に戻ったネズミや異性と部分的にまじりあう。ふたつの原子が共有結合においてたがいに相手の電子を共有するように。こうして人間はネズミになり、男は女になる。これは比喩ではない。いいかね、これは神話などではなく実話なのだと、ドゥルーズは続ける。そしてあなたの困惑をよそに、彼はこの宇宙論を科学的に実証するために、数学、生物学、物理学の諸説を次々と引用し始めるのだ。

ドゥルーズ哲学に特有のある種のいかがわしさ。それは、異星人や幽霊の存在を実証的・科学的に証明しようとする人々のいかがわしさに似ている。荒唐無稽な形而上学を説くためにのみ、自然科学を援用しているように見えるからだ。プラトンがイデア論の説明で、二頭立ての二輪戦車に乗って天空を駆けめぐる魂を描いたように、ドゥルーズも彼の形而上学を神話として提出したほうがよかったのではないか。そうすれば、「何が」問題であるかがより鮮明に現れたはずだ。だがドゥルーズは、重要な

は「何が」ではなく、「どのくらい」、「どのように」、「どんな場合に」なのだという<sup>1)</sup>。そして、その「どのように」を解明するためにこそ、ドゥルーズは諸科学を踏査するのである。そのような細部にこそ本質が存在すると、彼は考えているのだ。

だがドゥルーズが比喩を嫌い、フィクションに訴えない理由はもうひとつある。なるほどフィクションであれば、人がネズミになっても読者を困惑させることはないだろう。フィクションの世界を支配する法則が現実世界の法則とは異なることを、読者はあらかじめ承知しているからだ。だがそうであれば、叙述形式としてフィクションを選ぶことは、現実性の放棄を意味することになる。しかしその現実性こそ、ドゥルーズが決して手放すまいとするものなのだ。彼は自分の形而上学が実話であることを深く確信している。そしてまた、対話や議論は人間の思考に何ひとつもたらさないとも思っている<sup>2)</sup>。そのためドゥルーズの論証は、自分の確信を読者に共有させるためであるよりも、むしろ自分自身に対して確信を強化するためであるかのように見える。行間からはつねに、「あなたが信じようが信じまいが、これは本当なのだ」という声立ちのぼってくるのだ。とりわけ、ドゥルーズが「リアルréel」という単語を使うとき、その印象は強くなる。この言葉は彼の著作のなかで、「本当の」とでも訳すしかない独特の意味を担っている。この「リアルréel」という形容詞は特に、「現実態のactuel」という形容詞と対立的に用いられている。たとえば、ドゥルーズはこういつている。「潜在的なものvirtuelはリアルなものréelに対立するのではなく、現実的なものactuelにのみ対立する。潜在的なものは潜在的なものとして、十全なリアリティーを持っているのである<sup>3)</sup>。」つまり潜在態にあるものは、たとえわれわれの感覚器官が捉えうる現実の存在ではなくても、「本当のもの」なのだ。それがこの文の意味である。だがそれでは、ドゥルーズが執拗に「本当のもの」と主張する潜在態とは、いったいどのようなものなのか。

## 2. 潜在態

潜在的なものと現実的なものとの関係は、小説中の人物とその役を演じる映画俳優の関係に似ている。たとえばカミュの小説『異邦人』を読んだあとで、ヴィスコンティ

1) LB, p.39およびDR, p.236

2) Gilles DELEUZE et Claire PARNET, "Un entretien, qu'est-ce que c'est, à quoi ça sert?" in *Dialogue*, Flammarion, 1977

3) DR, p.269

## 脱領土化と実存的不安

が監督した『異邦人』を見に行く。そして、スクリーンに浮かび上がったマルチェロ・マストロヤンニの顔を見た瞬間に、「これはムルソーではない」と思う。小説中のムルソーは、マストロヤンニのように贅肉のついた中年男ではない。だいいちあの体型では、通りかかったトラックの荷台に飛び乗るために、あとを追って軽快に疾走することなど不可能であろう。とすれば、いったい誰をムルソー役に選ぶべきだったのか。ジェラルド・フィリップだろうか、アラン・ドロンだろうか。いっそのこと、リチャード・ギアにでも演じさせてはどうか。だがどの俳優の顔を思い浮かべても、「これではない」と思う。なぜそのようなことが起こるのか。

小説は言葉によって作られている。そして言葉のなかでも特に名詞は、類概念しか表しえない。たとえば「人間」という名詞が指し示すものは、他の誰とも入れ替えることのできない唯一存在としてのあなたやわたしではなく、すべての個体に共通する属性でしかない。つまり、「人間一般」である。したがって、このような類概念の積み重ねから生まれた小説中の人物は、決して現実の人間のような唯一無二の輪郭を備えることはできない。小説中のムルソーもまた、言葉によって作られた人物に特有の曖昧さを備えているのだ。ところが、現実の俳優はすべて唯一存在であり、その顔にはまぎれもない唯一性が刻印されている。そして、生身の人間である俳優の絶対的な風貌が、言葉によって作られた人物の変幻自在な輪郭と一致することは原理的にありえないのである。したがって、どんな俳優が演じようと、スクリーン上のムルソーは小説中のムルソーとは絶対に似ていない。現実態として出現した俳優は、潜在態にあった作中人物とは異なった存在なのである。「現実化された項は、その項が現実化する潜在性とは決して似ていない<sup>4)</sup>。」別のいい方をすれば、現実態から遡ってそれを生み出した潜在態にたどり着くことはできないのだ。「先験的なもの[潜在態]を、先験的なものが基礎づけるとされるもの[現実態]と同じ姿であり、似ているものとして思い描く<sup>5)</sup>」のは、誤りなのである。小説を読んでいない観客にとって、マストロヤンニの風貌からムルソーを想像しようとしても、誤った人物像にしかたどり着けないであろう。

現実の俳優の個性と比べて、小説の人物の輪郭はつねに曖昧にゆらめいている。だがそれは、小説の人物が無規定な存在だという意味ではない。彼らにも、俳優の個性とはレベルを異にするある種の個性が備わっている。たとえば『異邦人』のムルソーは、『嘔吐』のアントワーヌ・ロカンタンとも『赤と黒』のジュリアン・ソレルとも

4) DR, p.273

5) LS, p.128

絶対に似ていない。ムルソーは自然に対する感受性が強く、ロカンタンはブルジョワを憎悪しており、ジュリアン・ソレルは野心に満ちている。言葉によって作られたこれらの三人は、みな明確な個性を備えている。小説中の人物もそれぞれ「唯一性・特異性」を持っているのだ。つまり、「潜在的なものは、無規定であるどころか完全に規定されている<sup>6)</sup>」のである。

ここで、「唯一性」ないし「特異性」の意味を明確にしておこう。どちらの語もフランス語の*singularité*の翻訳だが、これはある個体が持つ、他の個体とは交換不可能な絶対的独自性を意味している。たとえば、猫Aと猫Bは猫類に属する点では同じであると見なすことができる。この場合は、それぞれの猫を猫類一般*général*の特殊例・個別例*particulier*として扱っていることになる。ところが、猫Aの飼い主にとって、猫Aは猫B・C・Dなどとは交換不可能な唯一性*singularité*を持っているのだ。つまり、ある個体に対する見方がふた通り存在し、一方の見方によれば一般概念の単なる一例であり、他方の見方によれば一般概念に還元しえない唯一の特異な存在になる。そして、生身の人間である個々の俳優が唯一性・特異性を備えているのと同様に、小説中の人物たちも唯一性・特異性を備えているのである。ただし、このふたつの特異性はレベルを異にしており、ふたつのレベルを混同することはできない。

潜在性のレベルにある特異性を、ドゥルーズは多様体という言葉で記述している。多様体とは「一」でも「多」でもないもの、あるいはむしろ、「一と多」という二項対立を乗り越えるための概念である。ドゥルーズはこの概念をベルクソンから借りている。ドゥルーズによれば、ベルクソンはふたつの多様体を区別した。ひとつは数的多様体であり、これは「分割されても性質を変えない<sup>7)</sup>」ものである。もうひとつは質的多様体と呼ばれ、「分割されれば性質が変わるもの<sup>8)</sup>」であって、潜在態にある特異性はこの質的多様体である。質的多様体は複数の要素でできているが、それらの要素ひとつひとつは独立した単位をなしていない。たとえば、白色光のなかにはあらゆる色が含まれているが、それらすべての色がそのままの形で白色光のなかにあるわけではない。白色光とは色のない光であって、そのなかに含まれるどの色もプリズムを通さないかぎり、色としては出現しえない。そして、プリズムを通過したのちに出現した個々の色が、現実態に移行した特異性である。小説中のある人物をさまざまな俳優が演じた場合、小説中の人物は母胎となる白色光であり、個々の俳優はその白色

---

6) DR, p.270

7) LB, p.34

8) LB, p.36

## 脱領土化と実存的不安

光が分化した赤や緑などの色である。したがって、すでに述べたように、個々の俳優は小説中の人物に絶対に似ることができないのである。

さてここで、特異性の定義に若干の修正を加えなければならない。というのも、ドゥルーズが特異性という言葉を用いる場合、潜在態にある特異性だけを指しているからである。ドゥルーズにとって、特異性とは固定した質や形を持ちえぬ不確定なものであり、現実態に移行した瞬間にその不確定性を失って本来の特異性ではなくなるのだ<sup>9)</sup>。この点において、潜在態*virtuel*は可能態*possible*とは異なっている。可能態と現実態との関係は、設計図と製品の関係にたとえることができる。設計図には製品の本質がすべて備わっており、欠けているのは質量（材料）だけである。したがって、可能的なものが現実的なものに移行しても、存在性以外はなににも変化しない。ところが、潜在的なものは分割される前の質的多様体であって、分化して現実態に移行すればその本性を変えることになる。「可能的なものとは潜在的なものは、次の点でもまた区別される。つまり、可能的なものが概念における同一性に基づくものに対して、潜在的なものはアイデアにおける純粋な多様性を指し示し、予備的な条件としての同一性を根本的に排除してしまうのである<sup>10)</sup>。」

現実態と可能態と潜在態のこのような区別は、ドゥルーズが「何によって構造主義を見分けるか<sup>11)</sup>」で行っている、数式による現実界と想像界と象徴界の区別にはほぼ対応している。現実界＝現実態は、「 $3 + 2$ 」という式で表される。3と2という数字は任意のものであり、他の数字でもかまわない。要点は、この式が固定された数値で構成されていることである。現実態にある物は固定された輪郭と質を備え、変化しない。これに対して、想像界＝可能態を表すのは「 $x^2 + y^2 = R^2$ 」という式である。この式では $x$ と $y$ の値は定まっていないが、個々の場合に応じて特定の数値を持ちうる。材料を指定していないテーブルの設計図のようなものだ。金属や木やプラスチックを代入すれば、現実態のテーブルが出現する。そして象徴界＝潜在態を表すのが、「 $ydy + xdx = 0$ 」あるいは「 $dy/dx = -x/y$ 」である。ここで $dx$ と $dy$ は、微少量というよりも未規定な量である。「 $dy$ は $y$ に対してまったく未規定であり、 $dx$ は $x$ に対してまったく未規定である。 $dy$ も $dx$ も存在もせず、値も持たず、意味も持たない。しかし、

9) 特異性*singularité*は数学用語では「特異点」であり、これに対立する言葉は「正則点*point ordinaire*（通常の点）」である。ドゥルーズは『意味の論理学』では、現実態に移行して不確定性を失った特異点を、「正則点（通常点）」と呼んでいる。

10) DR, p.273

11) "A quoi reconnaît-on le structuralisme?" in François Châtelet, *le XX<sup>e</sup> siècle, Histoire de la Philosophie Tome VIII*, Hachette, 2000 および、LS, p.148脚注3

$dy/dx$ という関係=比は完全に規定されており、ふたつの要素はこの関係=比のなかで相互に規定しあっている<sup>12)</sup>。」白色光に含まれるさまざまな色は、個々の色としては「存在もせず」、「値も持たない」が、それらの相互関係としての白色光は「完全に規定されている」。したがって潜在態にあるものは、不確定な特異性とでもいふべきものを備えているのである。

### 3. 脱領土化

潜在態にあるものは現実態に移行することによって不確定性を失うが、これはドゥルーズにとっては自由の喪失を意味する。現実態にあるものは限界のなかに閉じこめられ、固定した質に縛りつけられている。それらのものはすべて、「～であるêtre」という形で記述される恒常不変の状態から逃れられない。その状態から逃れることが、「～になるdevenir」である。こうして『意味の論理学<sup>13)</sup>』全体が、いかにして〈なる〉は可能かという問題を追求することになる。1968年の『差異と反復』では、潜在態がどのように現実態を生み出すかが焦点だったが、1969年の『意味の論理学』では、いかにして現実態から逃れるかが主題になったのだ<sup>14)</sup>。

この『意味の論理学』には、「前個体的*pré-individuel*」、「非人称的*impersonnel*」という言葉が肯定的な意味を担って頻出する。前個体的とは、現実態に移行して個体になる以前の潜在的状態を意味している。そして非人称的という言葉は、サルトルが『自我の超越<sup>15)</sup>』で用いた意味で使われている。サルトルのこの論文の出発点となるのは、「〈われ思う〉は、われわれのすべての表象に伴うことができなければならない<sup>16)</sup>」という、カントの言葉である。われわれが何かを知覚したり、考えたり、思い出したりする行為には、〈私が〉それらの行為を行っているのだという意識がつねに伴わなければならない。ただし、傍点を付した表現から明らかなように、カントはこれを権利上の問題として扱っている。しかし、権利上の問題は事実上の問題とは異なるはずである。そこで、サルトルはカントを批判するために、事実はどうであるのかを具体的に分析することになる。こうして出た結果は、否定的なものであった。たとえば過去の読書体験を回想する場合、その体験を回想している自分は、まさしくこの〈私が〉

12) Op. cit., pp.308-9

13) *Logique du sens*, Minuit, 1969

14) ただし、『差異と反復』は博士論文を出版したものだから、ふたつの著作の構想自体はもっと時間的に隔たっているはずである。

15) Jean-Paul SARTRE, *La Transcendance de l'ego*, Vrin, 1996

16) Op. cit., p.13 強調はサルトルによる。

## 脱領土化と実存的不安

その体験をしたのだと認定する。しかし、読書をしていた時の私の意識は本の内容に完全に吸収されており、〈私が〉その読書をしているという意識は存在しなかった。読書をしていた時の意識を非反省的意識、その読書体験を回想している意識を反省的意識と呼ぶことにすると、〈私が〉読書をしているのだという意識が発生するのは反省的意識においてである<sup>17)</sup>。こうしてサルトルは、自らに課した「絶対に非人称的な意識を思い描くことはできないのか<sup>18)</sup>」という問いに、肯定的な答えを与えることになる。つまり非人称的意識とは、何ごとかをなしながら、「〈私がJe〉これをしているのだ」という意識を伴わぬ意識である。ドゥルーズはサルトルのこの論文を、カント批判として決定的な重要性を持つものとして評価するが<sup>19)</sup>、ただし、非人称性を意識の地平のみに限定したのは誤りであるとしてつけ加える。ドゥルーズにとって非人称性という概念は、意識の地平を越えて人間存在全体にまで適用されるべきものなのである。そのとき人間は、〈私が〉という意識から解き放たれて匿名の存在になり、誰のものでもない存在になるのだ。

前個体的かつ非人称的な世界とは、特異性が住まう固有環境としての潜在態の世界である。「それら [特異性] は《ポテンシャルなもの [潜在的なもの]》のなかに分布しているが、この《ポテンシャルなもの》自体は〈自我 [個体]〉も〈私が [人称]〉も含まず、現実態に移行し事象化することによって〈自我〉と〈私が〉を生み出すのだ<sup>20)</sup>。」こうして、現実態において個体と人称の拘束を受ける以前の潜在態が、目指すべき地平になる。「われわれは、心理学・世界論・神学の全体を同時に損なう次のような二者択一を受け入れることはできない。個人と人称のなかにすでに捕えられた特異性か、さもなくば差異を失った深淵かの二者択一である。非人称的・前個体的な匿名の遊牧的特異性がひしめく世界が開かれるとき、われわれはついに超越性の領野を踏みしめるのだ<sup>21)</sup>。」潜在態は通常、ものみなが差異を失った混沌の世界であり、忌むべき世界だと思われている。だがそのような通説に抗して、非人称的・前個体的特異性という第三の次元を潜在態のなかに確保しなければならない。潜在態の世界こそが、現実態にある人間が目指すべきものなのだから。

潜在態へ向けての脱出、それが〈なる〉の目的である。〈なるdevenir〉は〈であるêtre〉とは異なった状態、いやむしろ状態ではなく、ひとつの〈である〉からもうひ

17) Op. cit., pp.30-1

18) Op. cit., p.19

19) LS, p.128

20) LS, p.125

21) Ibid.

とつのである〉へと移行する一瞬の運動そのものである。この〈なる〉こそが、固定した状態としての〈である〉からの脱出を可能にするのだ。したがって、現実態の束縛から逃れるためには、あらゆるものを〈なる〉の相の下に見なければならない。固定された質を表すのは形容詞であり、〈なる〉の機能を担うのは動詞である。そこでストア派は、「木は緑である *L'arbre est vert.*」という文でさえ、「木は緑になる *L'arbre verdoie.*」という文に変換したのだ<sup>22)</sup>。とはいえ、〈なる〉自体は実に捉えがたい運動である。その捉え難さは、「塵も積もれば山となる」という諺によく現れている。この諺にはふたつの状態（塵と山）と、一方の状態から他方の状態への移行（なる）が含まれている。だが、その〈なる〉を正確に捉えることは可能だろうか。「いつ」塵は山になるのだろうか。しかしわれわれは、〈山〉を出現させる決定的なひと粒がどの〈塵〉であるのかを決して知りえないのである。われわれは絶対に〈塵〉が〈山〉になる瞬間を目撃することができない。〈なる〉を目撃したと思った瞬間に、〈なる〉はすでに〈である〉に変貌しているのだ。

ドゥルーズによればプラトンは『パルメニデス』で、〈なる〉は「現在を回避する力である」といい、そのあとでこうつけ加えている。「《現在を回避する》こと、それこそ〈なる〉がなしえぬことである（なぜならば、〈なる〉は今という時点において〈なる〉なのであって、この《今》を飛び越えるわけにはいかないからだ）<sup>23)</sup>。」〈今〉という時間は物が固定された姿でしか存在しえぬ時間であり、〈である〉に固有の時間である。〈なる〉は出現するためにはその〈今〉を通過しなければならず、通過した瞬間に〈である〉に変貌してしまうのだ。この〈なる〉と〈である〉の問題は、『アンチ・オイディプス<sup>24)</sup>』にも受け継がれていく。『アンチ・オイディプス』では、固定された状態からの脱出運動としての〈なる〉は「脱領土化 *déterritorialisation*」と呼ばれ、その不可視の運動が再び〈である〉と化して固定されるのが「再領土化 *re-territorialisation*」である。

たとえば、人間はかつて原始共同体や古代専制国家への帰属意識を持ち、これらの組織につながれていたが、資本主義の発達に伴ってそのような帰属意識を失った。この場合、原始共同体や古代専制国家が固定された状態・領土であり、そこからの離脱が脱領土化である。ところが、いかなる集団への帰属意識も失った脱領土化後の人間は、この根無し草状態にたえられず、寄り集まって人工的な集団を形成し始める。こ

22) LS, p.15

23) LS, p.192

24) Gilles DELEUZE et Félix GUATTARI, *L'Anti-Œdipe*, Minuit, 1975



## 脱領土化と実存的不安

れが再領土化である。こうして少数民族集団、バスク独立派、町内会、団地の仲間、不良グループなどができたのだ。脱領土化のあとには再領土化が控えている。「たがいに相手に捕えられ、同じ過程の裏と表である脱領土化と再領土化は、極端な場合には区別することができなくなる<sup>25)</sup>」のだ。「ファシスト国家はおそらく、資本主義においてもっとも幻想的な経済的・政治的再領土化の試みである<sup>26)</sup>。」だが、そうした再領土化の危険をかいぐって領土から脱出し、〈である〉から逃れなければならない。そして、再領土化に陥らぬために目指すべきものが、「器官なき身体corps sans organes」なのである。

器官なき身体という概念の定義は著作によってずれがある。『意味の論理学』では、器官なき身体は部分対象objets partielsの対立概念であった。一方には、摂取しても同化されず、内側から身体を傷つける部分対象があり、他方には流体のように部分を持たない全体がある。この流体としての全体が器官なき身体である<sup>27)</sup>。また、『アンチ・オイディプス』の5年後に出版された『千のプラトー<sup>28)</sup>』によれば、「器官なき身体とは、器官のない虚ろな身体のことではなく、器官の役割を果たすもの（オオカミ、オオカミの目、オオカミのあご？）が群衆現象により、ブラウン運動のごときものに従って、分子の多様体という形でその上に配置される身体のことである。砂漠にも多くのものがひしめいている。したがって、器官なき身体は器官に対立するよりも、有機体をなす限りでの器官の組織化に対立しているのである<sup>29)</sup>。」

『意味の論理学』と『千のプラトー』に挟まれた『アンチ・オイディプス』では、器官なき身体という概念はかなり広い意味で用いられている。『アンチ・オイディプス』によれば、「部分器官[部分対象]と器官なき身体とはまったく同じものであり、まったく同じ多様体<sup>30)</sup>」である。器官なき身体は白色光のような多様体であり、部分器官=部分対象はその白色光に含まれる個々の色である。「部分対象は器官なき身体の直接的な力であり、器官なき身体は部分対象の原料である。器官なき身体はつねに空間をさまざまな度合で満たす原料であるが、部分対象はそれらの度合、それらの強度部分であって、これがゼロ強度としての原料から現実的なものを空間のなかに生み

25) ACE, p.307

26) Ibid.

27) LS, "Treizième série, du schizophrène et de la petite fille"

28) Gilles DELEUZE et Félix GUATTARI, *Mille plateaux*, Minuit, 1980

29) MP, p.43

30) ACE, p.390

31) Ibid. 強調は原著者

出すのである<sup>32)</sup>。『意味の論理学』では対立していた器官なき身体と部分対象が、ここでは同じものになる。器官なき身体は潜在態にある原料であり、部分対象はその原料を加工して現実態へと送り出す契機である。ドゥルーズ＝ガタリは、「器官なき身体とは、語のもっともスピノザ的な意味での内在的実体なのだ<sup>32)</sup>」ともいっている。「器官なき身体とは実体substanceそのものであり、部分対象はその実体の属性attributsないし究極的要素éléments ultimes<sup>33)</sup>」なのである。ドゥルーズの世界でも唯一の実体から万物が生まれるのだ。そのため、すべての地上的存在を生み出すイデア的母胎への回帰が、脱領土化の目的となるのである。

だがここで、ひとつの疑問が湧いてくる。脱領土化はそれほど価値ある行為なのか、万人が目指すべき目的なのかという疑問である。原理的には、現実態にある人間は自分を生み出した母胎である潜在態に回帰することはできない。ひとたびこの世に生まれた者は、生まれる前の世界に戻ることはできないのだ。だが、原理的不可能性が人を思いとどまらせることはない。ドゥルーズは不可能な試みを実践する。彼が行っているのは、潜在態へ帰れというスローガンを大声でくり返すことではなく、不可能な試みである脱領土化がこの現実の世界で「どのように」行われうるか、「どのように」行われているかを、執拗に記述することである。それがドゥルーズのすさまじさだ。とはいえ、その「どのように」の先にある目的を問題にすることはできる。脱領土化が目指す「自由」はそれほど価値あるものなのか。なぜならば、一世代前のサルトルにとっては逆に、自由は実存的不安をもたらすものだったからである。

#### 4. サルトルの冒険

『嘔吐』の主人公ロカンタンがぜひとも実現したいと願う「冒険」は、非日常的な出来事のことではない。メリハリもなく過ぎてゆく日常生活のなかに、くっきりとした輪郭で浮かび上がる出来事であれば何でもよいのだ。別に難しいことではない。「どんなありふれた事件でも冒険にしようと思えば、それを語り始めることが必要であり、それだけで十分である<sup>34)</sup>。」つまりロカンタンは、現実の生活が小説のなかの出来事のように明確な輪郭を備えることを望んだのだ。冒険は言葉で記述されることによって成立する。ところがその言葉自体が、ものの形を整える力を失うことになる

32) Ibid.

33) ACE, p.369 脚注

34) Jean-Paul SARTRE, "La Nausée" in *Œuvres romanesques*, Gallimard, 1981, p.150

## 脱領土化と実存的不安

のである。

ロカントンがマロニエの根を見つめて、存在物existantの無規定性を悟る場面の直前に、次のような記述がある。

私も彼らのように、「海は緑くである」。あの高いところにある白い点、あれはカモメくである」といったものだが、それが存在すること、カモメが《存在するカモメ》であることは感じていなかった。普通、存在existenceは隠れているものだ。存在はそこに、われわれの周りに、われわれのなかにあり、われわれ自身であり、ちょっとしたことをいうにも存在について語らずにはいられないが、結局、存在に触れることはできない。私が存在のことを考えていた時も、私は何も考えてはいなかったと信じるべきだ。私の頭は空っぽであったか、せいぜいひとつの単語、《である=あるêtre》という単語が頭にあったにすぎない。というか、私が考えていたのは……どういえばいいのだろう？ 私は〈帰属〉のことを考えていて、海は緑色の物体の集合に属するとか、緑色は海の性質に属するとか思っていたのだ。物を見つめているときでさえ、私はそれらの物が存在するということにまったく思い至らなかった<sup>35)</sup>。

ここで問題になっているのは、êtreという動詞の使い方である。êtreは主語と属詞をつなぐ繫辞としての機能（SはPである）を持つほか、自動詞として「存在する（ある）」という意味でも使われる。ところがこの〈ある〉は、普段はくである〉の奥底にひっそりと身を隠している。ロカントンはその〈ある〉が突然浮上してくるのを目にしたのだ。それまではくである〉が存在を固定し、堅固な形と属性のなかに閉じこめていた。「海」という存在はくである〉によって「緑色の物体」という項目に分類され、類概念で規定されていたのだ。だがロカントンが発見したくある〉が、そのような規定を内側から突き崩したのである。〈ある〉はもはや存在するものすべてに外から当てはめることのできる空虚な範疇ではなくなり、範疇の枠からあふれ出して形を持たぬ無規定の質量と化したのだ。「別の世界では、円も音楽の調べもその純粹で堅固な輪郭を保っている<sup>36)</sup>」のに、ロカントンのいる世界ではすべてのものが差異を失い、輪郭を失っていく。「言葉が消え失せ、言葉とともに物の意味も使用法も、人

35) Op. cit., p.48

36) Op. cit., p.151

37) Op. cit., p.150

間が物の表面につけたかすかな目印も消え失せたのだ<sup>37)</sup>。」こうして言葉の持つ物を規定する能力が消滅し、ロカントンの目指した冒険が崩壊する。そして、「冒険」のもうひとつの側面も同時に崩壊していく。

出来事を外側から記述するとき成立する「冒険」は、内側から生きるときには「おのおのの瞬間が、それに続く他の瞬間を導くためにのみ現れる<sup>38)</sup>」ような時間の連鎖として出現する。つまり冒険とは、孤立した瞬間相互のあいだに有機的関連をうち立てる試みでもあるのだ。ある予感によって、ひとつの瞬間はそれに続く瞬間を予告するものになる。ロカントンは自分の「生活の各瞬間が、人が回想するときの生活の瞬間のようにつながり、秩序立てられるのを望んだ<sup>39)</sup>」のだ。だがこの瞬間相互の有機的関連もまた、崩壊することになる。

ロカントンは見つめていたマロニエの根から目を上げる。しかし、目を伏せていた状態のすぐあとに、いきなり目を上げ終わった状態に移行したかのようなのだ。ふたつの状態のあいだにあるはずの、徐々に目を上げるという過程が抜け落ちてしまっている。「私はむしろ瞬時消滅し、一瞬後に再び生まれたのではないのか<sup>40)</sup>」と、ロカントンはいぶかる。この疑念はもちろん、デカルトが『省察』で行った神の存在証明を念頭に置いたものである。デカルトはこういつている。

私の人生の全時間は無限の部分に分割することができ、それらの部分はどのような形でも他の部分に依存していないのだから、この瞬間に何かの原因がいわば私をもう一度生み出し、創造するのでなければ、つまり私を保存するのでなければ、少し前に私が存在したからといって、今も私が存在するはずだということにはならない<sup>41)</sup>。

人間と世界が各瞬間ごとに存在するのは確実だが、ひとつの瞬間が次の瞬間へと接続されるためには、神の「不断の創造*création continuée*」が必要になるのだ。神の死後の時代に生きているロカントンは、ふたつの瞬間の連続性を確認するために、それらの瞬間を結びつける運動を捕えようとする。

38) Op. cit., p.47

39) Op. cit., p.50

40) Op. cit., p.156

41) Descartes, "Les Méditations", in *Œuvres philosophiques Tome II*, Garnier, 1967, p. 450

## 脱領土化と実存的不安

私は枝が揺れるのを目で追いながら、こう思った。運動は決して完全には存在せず、ふたつの存在のあいだの移行であり、中間であり、弱拍である。私はその弱拍が無から出現し、徐々に熟して花開くの見ようと身構えた。私はついに、生まれつつある存在を目撃しようとしていたのだ。

私の希望がすべて潰え去るには、三秒とかからなかった。周囲を盲目的にまさぐっているそのためらいがちな枝々の上に、私は存在への〈移行〉を捕えることができなかつたのだ<sup>42)</sup>。

こうしてロカントンは、存在が時間の試練をくぐり抜けてひとつの状態から他の状態へと移りゆく運動を捕えることに失敗する。その運動こそ、ドゥルーズが〈なる〉と呼んだものである。ドゥルーズの言葉に置き換えれば、サルトルはひとつの〈である〉から他の〈である〉への移行を可能にする〈なる〉を取り逃がしたのだ。つまりサルトルとドゥルーズは、同じ問題を正反対の態度で扱っていることになる。ドゥルーズにとっては〈なる〉こそが目指すべき目標であるのに、サルトルは〈なる〉の不可能性を宣言するからだ。ドゥルーズにとって〈なる〉は〈である〉からの解放であり、輝かしい自由であった。だがサルトルにとって、〈である〉と〈である〉のあいだには無人の空白地帯しか存在せず、〈なる〉とはふたつの〈である〉の狭間に転落することにほかならない。

ブーヴィルの町を最終的に立ち去る決心をしたロカントンの目に、町は過去の姿と未来の姿に分裂して現れる。「私はふたつの町のあいだにいて、一方の町は私を知らず、他方の町はもはや私を覚えていない<sup>43)</sup>。」時間が緊密な関連を失って各瞬間が孤立し、ロカントンはその狭間に取り残される。彼はその狭間を生きることができない。そして人生においても、狭間を生きることには失敗し続けてきたのだ。数年間何かに没頭したあと、不意に陶酔から醒めたようにすべてを投げ出し、まったく別のことを始める。彼の人生はそのくり返しであった。各瞬間をつなぐ〈なる〉が存在しないのと同様に、ロカントンの人生は分断され、それぞれの時期をつなぐ移行期が存在しないのである。こうして時間的関連を失った世界では、空間的関連も消滅し、ものみなが孤立していく。

私は虚しくマロニエの木を数えようとし、それらの木々をヴェレダ像との関係で

42) Ibid.

43) Op. cit., p.200

位置づけることを試み、プラタナスの木と高さを比べようとした。マロニエの木のどれかが、私が閉じこめようとした関係から逃れ、孤立し、はみ出していった。(人間の世界、尺度、質、方向が崩壊するのを遅らせるため、私が執拗に維持しようとしていた) それらの関係は、恣意的なものだと感じられた<sup>44)</sup>。

ロカンタンにとって、時間においても空間においてもあらゆる関係が断ち切られ、人間の存在もまた、他者とのつながりを欠いた孤独こそが本来のあり方となる。こうしてあらゆる規定を免れたロカンタンは、非人称的意識と化す。

今となつては、私が〈私が〉といっても虚ろに響く。私はもう自分を明確に感じとることができない。(中略) そして突然、〈私が〉が青ざめ、青ざめて進退きわまり、消滅した。

明晰で不動で誰もいない意識が、壁のあいだに置かれている。意識は生き続ける。その意識にはもう誰も住んでいない。つい今しがた、まだ誰かが〈私〉といい、〈私の〉意識といていた。いったい誰だったのか? 先ほどまで、覚えのある色と臭いに満ちた、話し声のする街路があった。今残っているのは、匿名の壁と匿名の意識だ。今あるのは壁と、そしてその壁に囲まれた、小さな生きた非人称的透明性だ。意識が一本の木のように、一本の草のように存在している<sup>45)</sup>。

ここでロカンタンは、「非人称性impersonnalité」を「離人症dépersionnalisation」にも等しい状態として体験し、現実感覚を失うことになる。そして、無規定な匿名のものしか存在しない世界に転落する。だがドゥルーズにとって、非人称的・前個体的状態は完全に規定性を失った深淵ではなかった。潜在態に存在するものは、まったく形を持たない質量ではなく特異性だからである。ドゥルーズが目指すのは「非人称的・前個体的な匿名の遊牧民的特異性」であって、「差異を失った深淵」ではない。ドゥルーズにとっては、完全に規定された現実態と完全に無規定な質量との中間に、潜在態における特異性という第三の次元があるのだ。だがサルトルにとっては、「個人と人称のなかにすでに捕えられた特異性か、さもなければ差異を失った深淵かの二者択一」しか存在しない。そのため、「差異を失った深淵」から逃れようとするれば、完全な規定性の方へと進むしかない。現実存在するものの曖昧さ、その脆弱な頼りなさから

44) Op. cit., p.152. 強調は原著者

45) Op. cit., p.200

## 脱領土化と実存的不安

逃れるためには、現実の影響をまったく受けない堅固なものを、現実とは別の世界に求めるしかないのだ。そしてロカントンはブーヴィル出発の直前に、決定的な発見をすることになる。

町を立ち去るロカントンのために、馴染みのカフェのウエイトレスが"Some of these days"のレコードをかける。その黒人女性歌手の歌声を通してロカントンが触れたのは、「ダイヤモンドの小さな苦しみ<sup>46)</sup>」であった。その堅く結晶した透明の苦しみは、現実の手の届かぬアイデアの世界に属していた。「(中略)もしそのレコードを、それが乗っているターンテーブルからもぎ取ってふたつに割ったとしても、私はその苦しみに手を触れることができないだろう(中略)<sup>47)</sup>。」レコードについての疵のために雑音が入っても、苦しみの結晶は無傷のままである。「なぜならば、レコード上の針が小さな咳をしようと、メロディーは絶対に影響を受けないからだ。(中略)過去も未来もなく、ひとつの現在からもうひとつの現在へと落ちていく存在物の背後で、日ごとに分解し、かすり傷を負い、死の方へと滑っていくあれらの音の背後で、メロディーは非情な証人のように、若く堅固で、同じままである<sup>48)</sup>。」

音と音との有機的關係としてのメロディーは、完璧に規定された抽象的実体である。それがロカントンの見いだしたものであった。そのアイデア的実体は、冒険とは違って彼の外部にとどまっている。しかしロカントンにとっては、現実の彼方にあるその堅固なアイデアが唯一の救いになるのだ。たしかに、人生そのものを堅固な結晶に変えることはできない。だが、小説によってアイデア的実体を作り出すことは可能である。"Some of these days"の作曲者が、音楽によって「ダイヤモンドの小さな苦しみ」を作り出したように。こうしてロカントンは小説を書く決意を固めることになる。ドゥルーズにとってはあまりにも硬直したものであった現実態の世界は、サルトルにとってはあまりにも脆弱なものだったのだ。したがって、ドゥルーズには硬直からの脱出が目的となるのに対して、サルトルにとっては堅固な形を求めることが目的になるのである。

## 5. 日本の状況

人間は本質的に〈である〉によって拘束されぬ無規定な存在であるとするサルトル

46) Op. cit., p.206

47) Ibid.

48) Ibid.

ルは、呪われた自由から逃れて実存的不安を解消するために、「自己拘束engagement」へと向かうことになる。『嘔吐』のロカンタンが、「何でもいいから何かすることを与えて欲しい<sup>49)</sup>」といていたように、ひとつの目標を定め、その目標によって自己を拘束するのがサルトルの倫理学なのだ。だが自己拘束とは、ドゥルーズ流に言えば再領土化である。したがって、再領土化を批判するドゥルーズの倫理学もサルトルの倫理学とは対照的なものになる。ドゥルーズが支持するのは、ストア派の倫理学である。ストア派はわが身に起こる出来事をありのままに受け入れ、どのように過酷な運命であろうと恨みを抱かなかつた<sup>50)</sup>。ドゥルーズにとって、目標設定ではなく現状への対処が問題なのだ。

人生の目標を定めること、あるいは再出発することと、わが身に起こる出来事を受け入れること。その相違は、これから生きようとする人間と、すでに生のただなかにいる人間との相違でもある。このふたつの立場の違いを、ドゥルーズは「英米文学の優越性について」で論じている<sup>51)</sup>。

フランス流のやり直しは白紙還元であり、つねに堅固な点である原点としての最初の確実性を求めることである。それとは逆に、もうひとつのやり直し方は中断された線から再開し、折れ線に線分をつけ加え、もとの線が中断された場所に、つまり、ふたつの岩のあいだや隘路や虚空の上に、その線を通してやることだ。興味を引くのは決して始めや終わりではないし、始めや終りは点なのだ。興味を引くのは中間であり、イギリス流のゼロはつねに中間にある<sup>52)</sup>。

「英米文学の優越性について」とは、もちろん「フランス文学に対する優越性」を意味している。ドゥルーズは、ロカンタンのようにすべてをゼロに戻して再出発するフランス流の生き方を嫌う。人は生まれた瞬間すでに生のただなかにおいて、出発点を選ぶ自由など与えられていないのだ。潜在態から現実態へと移行した人間は、生まれた瞬間に強固な規定に縛られ、個の輪郭の中に閉じこめられる。だがそのようなドゥルーズの想定は、現代日本の状況に当てはまるだろうか。日本においてはむしろ、個の輪郭を持ちえぬことのほうが問題ではなからうか。開高健の例を見てみよう。

49) Op. cit., p.204

50) LS, "20<sup>e</sup> série, sur le problème moral chez les Stoïciens"

51) "De La supériorité de la littérature anglaise-américaine" in *Dialogue*

52) Op. cit., p.50



## 脱領土化と実存的不安

昭和52年（1977年）8月初旬から約70日間、釣竿を手にしてアマゾン川で巨大魚を相手に格闘した開高健は、帰国直前にすさまじい脱力感に襲われる。

空港のロビーの人ごみのなかを釣竿を持って歩いていると、ふいに背後から滅形が襲ってきた。肩を殴られたような衝撃があり、一瞬で私は崩れてしまった。空と、水と、ジャングルと、魚がつくりあげてくれたものが、カードのお城のようにへたへたと倒れてしまった。これから私はブラジリアへいき、そこで何日かすごし、つぎにサンパウロへ引揚げ、東京行きの飛行機に乗りこむのだ。もう釣りはしないし、できないのだ。大陸に、湿原に、雨が降る。帰国したら何が待っているか、私にはわかりすぎるくらいわかっている。もう半身は帰国したようなものだ。クイヤバ空港を歩きつつ私は羽田空港を歩いているのだ。一瞬で私は滅形し、なじみ深い、荒涼とした、いいようのない憂鬱がたちこめてくる。これからはもう犯されるままに私は形を失い、淀んで腐った潮溜りとなって日々をやりすごしていくのである<sup>53)</sup>。

帰国を前にしてのこの脱力感は圧倒的である。開高は帰国後に日本で形を失うことを確実に予感している。彼は自分が形を失いだらしなく溶けていくことを恐れ、生涯をかけて抵抗したが、「滅形」をやり過ぎす術を覚えたただけであった。だがこの滅形も、作家活動の初めから彼にとり憑いていたわけではない。1959年の『日本三文オペラ<sup>54)</sup>』には、戦後のどさくさ紛れに大阪造兵廠跡のスクラップを狙う食いつめ者たちが登場する。彼らは鉄材を引きはがすためにチームを組み、各人のエネルギーが有機的な関連をなしてひとつの目的に注ぎ込まれ、誰もが現実の手応えとともに自己の存在を明確に感じ取っていた。だが翌年の『ロビンソンの末裔<sup>55)</sup>』から、早くも滅形の影が忍び寄る。北海道の不毛の奥地に入植した一家の努力がすべて水泡に帰し、徒労感のみが残るからである。その後開高は記者としてベトナム戦争に従軍し、その体験をもとに『輝ける闇<sup>56)</sup>』を書き上げるが、これは戦争という外部の形に自分を押し込んでなんとか滅形から逃れようとする試みであった。滅形に徹底的に身をさらしてその極限を見極める試みであるはずの『夏の闇<sup>57)</sup>』ですら、戦場に向かう決意で終わる

53) 開高健、『オーパ』、集英社文庫、昭和58年、236ページ

54) 開高健、『日本三文オペラ』、角川文庫、昭和49年

55) 開高健、『ロビンソンの末裔』、新潮文庫、昭和49年

56) 開高健、『輝ける闇』、新潮文庫、昭和57年

57) 開高健、『夏の闇』、新潮社、昭和47年

のだ。滅形は死ぬまで開高につきまとう。

外部の形に頼ることなく滅形をやりすごす術を開高に与えてくれたのは、食の世界と釣りである。これは滅形そのものを解決する手段ではなく、滅形から生じる現実感喪失への対症療法である。つまり、きわめて具体的な感覚によって現実との接触を回復する手段なのだ。特に釣りの最中は、魚という現実の対象の持つ手応えが、開高に充実した身体感覚を味わわせてくれる。だがその一瞬の充実感ののちに、やはり「背後から滅形が襲ってきた」のだ。そしてその滅形を、日本という国が加速する。

形を失うことへの恐怖は開高健ひとりの問題であり、彼の死とともに消滅したといえるのだろうか。2000年に出版された村上龍の『希望の国のエクソダス』に、後藤という27歳の青年が登場する。彼は「父親の仕事の関係で数年間南米のペルーに住んだことが<sup>58)</sup>」ある。その後藤が、小説の終わり近くでペルーに帰る決心をする。そして、主人公にこう打ち明ける。

「ペルーの空気は」乾いていて、朝とか寒さがピンと張りつめていて、青臭いことを言うようだけど自分のからだど世界の境界がはっきりするような気がするんです。自分がここにおいて、からだの輪郭を包むようにして世界がその周囲にあるって当たり前のことですけどね、はっきりとしているんです。日本にいたとしても過ごしやすいです。(中略)でもときどき自分が本当にここにいるのかどうかってことが曖昧になってしまうことがあるんです。自分のからだど外側の世界の境界がはっきりしない。自分のからだ溶けてしまって自分のからだを確認できないような感じがするときがあるんです<sup>59)</sup>。

ここに見られるのはまさしく、開高が帰国直前に襲われた「滅形」である。後藤はその滅形から逃れるために日本から出ていくのだ。とすると、日本は滅形の国なのだろうか。開高健と村上龍のふたりの例だけで日本の状況全体を語ることはできないにしても、現実によって強固な形を押しつけられるというドゥルーズの束縛感よりも、サルトルの実存的不安のほうがより日本人の現状に近いのではなかろうか。とはいえ、これはサルトル流の自己拘束が今でも有効であるという意味ではない。開高健のベトナム戦争参加という自己拘束が、彼の滅形を解決しなかったのは明らかなのだから。

これに対してドゥルーズの哲学は、たしかに資本主義の分析として有効な部分を含

58) 村上龍、『希望の国のエクソダス』、文藝春秋社、平成12年、55ページ

59) 『希望の国のエクソダス』、350-1ページ

## 脱領土化と実存的不安

んでいる。たとえば彼は、「自分が機械の歯車であると感じることの、無目的な暴力、喜び、純粋な喜び<sup>60)</sup>」を批判する。これはまさしく、目的に対する価値判断を差し控え、自分の持場で最大限の力を発揮することだけを目指す日本的労働の「喜び」そのものである。そして開高健の釣りもまた、その本質において同じ構図に収まるのだ。とはいえ、ドゥルーズの脱領土化がそのままの形で日本でも有効であるとは思えない。「滅形」現象がいまだに存在する日本において、脱領土化の手放しの礼賛は現状を追認し、形を持たぬことを正当化するだけだからだ。ドゥルーズ哲学を日本に移植するには、つねに細心の注意を払わなければならないのである。

## 参考文献

ドゥルーズの著作は、脚注では（ ）内の略号によって示した。

Gilles DEULEUZE, *Le Bergsonisme* (LB), PUF, 1968

Gilles DEULEUZE, *Différence et répétition* (DR), PUF, 1968

Gilles DEULEUZE, *Logique du sens* (LS), Minuit, 1969

Gilles DEULEUZE et Félix GUATTARI, *L'Anti-Œdipe* (AŒ), Minuit, 1975

Gilles DEULEUZE et Félix GUATTARI, *Mille Plateaux* (MP), Minuit, 1980

Gilles DEULEUZE et Claire PARNET, *Dialogue*, Flammarion, 1977

Gilles DEULEUZE, "A quoi reconnaît-on le structuralisme?" in *François Châtelet, le XX<sup>e</sup> siècle, Histoire de la Philosophie Tome VIII*, Hacette, 2000

Jean-Paul SARTRE, *La Transcendance de l'ego*, Vrin, 1996

Jean-Paul SARTRE, "La Nausée" in *Œuvres romanesques*, Gallimard, 1981

René DESCARTES, "Les Méditations", in *Œuvres philosophiques Tome II*, Garnier, 1967

開高健、『日本三文オペラ』、角川文庫、昭和49年（初版は昭和34年）

開高健、『ロビンソンの末裔』、新潮文庫、昭和49年（初版は昭和35年）

開高健、『輝ける闇』、新潮文庫、昭和57年（初版は昭和43年）

開高健、『夏の闇』、新潮社、昭和47年

開高健、『オーパ』、集英社文庫、昭和58年（初版は昭和53年）

村上龍、『希望の国のエクソダス』、文藝春秋社、平成12年

---

60) AŒ, p.415